

第19回 日能研

# 文学コンクール

## 優秀賞

【創作文】郵便物泥棒とひるねうちゅうじん

大阪教育大学附属平野中学校・二年

藤井 律さん

### 作品に対する思い・感想

自分の書いた作品が評価されることは初めての体験で、驚くとともに心から嬉しく思います。頑張ったなあ、と作品を褒めたくありません。

書きたいものはあるのに、ここまで言語化することが難しいとは思いませんでした。やってみなければわからなかったことです。大切な経験になりました。

優秀賞に選んでくださった選考員の皆様、最後まで協力してくれた家族、支えてくれた周りの人たちには感謝の言葉しかありません。

## 郵便物泥棒とひるねうちゅうじん

ある夜彼は家の近くのポストへ向かっていました。手紙を出すためです。

その次の日の早朝、同じく彼女はポストへ向かっていました。手紙を出すためです。

でも、投函された2枚の手紙は、なぜか半分食べられたみたいな跡を残した状態で郵便配達のお兄さんに見つけられたのでした。

---

友人は宇宙人らしい。高校生の時、本人から唐突に言われた。口を滑らしたようで、直後「あ、」と言う顔をしてそのまま気まずそうに俯いた。僕はその頃そういうオカルト系の類が好きだったこともあり、話には興味をそそられた。しかし僕は結局そのことを深く聞かなかった。いつも陽気な友人が思い詰めている。その事実だけで、僕はくわしく聞いて欲しいわけではないという友人の心情を察した。本音を言ってしまえばなんと言ってやれば良いのかわからなかったということもある。だから、へえ知らなかったと言えば、友人は拍子抜けした顔をして、俺も昨日知ったばっかやねんと泣きながら笑った。

その話の真偽を確かめることもなく12年経った。12年とは思いの外長い年月で、僕のオカルト好きもとうに薄れたし、当時高校生だった僕らは大人になって、結婚して、子供が生まれた。

そして今現在、8月の2週目の土曜日の20時半頃、僕らは二人で飲んでいる。そこら辺の居酒屋で。

「なあ、谷田んとこの息子どうや？」

「どうって、なにが」

「一昨日5歳になったんやろ？そろそろ小学校とか考えなあかんのちゃうかて思ってる」

その通りうちの息子の慧は今年で5歳になった。星野の娘の八重ちゃんは今年2歳になる。「星野こそ大丈夫かよ、八重ちゃんのイヤイヤ期。こないだ行った時片鱗みえたわー。イヤイヤ期に嫌気さしてお前イジイジ期はいんなよ、イヤイヤ期とイジイジ期とか字面だけでもややこしいのに実際にいるとなると嫁さんがが気の毒で仕方ない」

「失礼なやつやなほんまに！」

今は8月の折り返し地点だが二人で飲むのは今月でもうすでに4回目になる。先月も同じくらいのスピードで飲んでいるのでそろそろグーが飛んできそうだ。アグレッシブな嫁なのだ。

そんな数ある飲み会の中でも今回の飲み会は稀だ。いつもはどちらかの家で行う飲み会を外でしているから。今回だけ居酒屋にしよう、と星野の方から提案があった。

「というかお前突然飲み屋なんてなんだよ。なんや、浮気でもしたんか？」

とは言っているがまさかあの星野が浮気なんてするわけがない。そんな器用なことができるか。それから変な間が空いたので本当に浮気の相談かもしれないとちょっと身構えながら星野の返事を待った。明日はお互い休みだ、根気強く相談には付き合おう。

「いや、ちょっと言いづらいんやけどな。」

「やっぱ浮気か！」

「違う！それは違う！お前その話うちの嫁さんの前で言うなよ、変な誤解が伝わったらグーが飛んでくる」

どこの嫁も結婚して何年か経つとアグレッシブになるものらしい。

「浮気やないけど…絶対広めるなよ、そこは信用してるからな。」

「おう。」

「嫁さんにも、息子にも言うなよ。誰もおらんと思って虚空に向かって言うのも無しやからな。」

「わかったって。早く言えよ。」

「相談があるんや。まずはちょっと聞きたいんやけど」

と先に星野は言ってからちょっと声を小さくして話し始めた。

「覚えてるか、俺が宇宙人やって話したの。なんか俺は宇宙人の中でも昼寝宇宙人て言う宇宙人らしくてな。」

「なんやその間抜けそうな名前の宇宙人は」

「言うなって。お袋が昼寝宇宙人の一人らしくてさ。親父は違うけど、俺らが昼寝宇宙人やってことは知ってたらしい。俺はお袋の子供やから、俺も昼寝宇宙人やって言われたんや。」

「へえ。てことは、お前が昼寝宇宙人やお袋さんに言われたんが高校生の時ってことやな？お前が俺に口滑らしたみたいに言っちゃった事件。」

「や、別に口滑らせたわけやないんや。谷田には絶対言おうって思ってたし。タイミング間違えただけや。でも、基本言うたらあかん話やし、もし広まったら昼寝宇宙人代表して俺とその話広めた地球人代表のお前で切腹や」

「いやめっちゃ古風やんけ、まあ罰としては十分やねんけどあまりにも古風すぎやしないか。というか俺聞いた後やからもう既に命狙われてる？」

「それ言い始めたら高校の時から秘密知ってるし、生きてるんやったら大丈夫やろ。」

「大丈夫ってお前な〜…」

呆れはするが怒らないのは、口を滑らしたわけではないと聞いて、少し嬉しくなったからだ。こういうところは自分でもちょろいなと思う。

でも確かにあの時はタイミングがかなり悪かった。…というわけでもない。僕はあの事件の翌日に大学入試を控えていて、ガチガチに緊張していた中、宇宙人という爆弾を落とされ

た。逆にそっちが気になって緊張をするのを忘れていた。無事受かったので逆にあのタイミングは良かったのかもしれない。

そして僕は開き直って昼寝宇宙人の話を最後まで聞くことにした。

「で、その昼寝宇宙人って言うのはなんなんや。」

「歴史とかから言うとな。江戸時代ぐらいの時に、地球に来た宇宙人らしい。容姿も、臓器も、生活様式も、生写しの星みたいに地球人とおんなじ。やけど、1日が18時間しかない世界から来た宇宙人やから、15時あたりになると、みんな寝てまうんや。それが地球人と昼寝宇宙人の違いやて。」

「そのまんまやんけ、ただ昼寝してるだけやん。ほんまに宇宙人なんかお前」

「いや待て違う。ほら、あれ。特殊能力みたいなもんもあるで。すごいやろ、な？俺宇宙人やから。」

小声でチョット怪しいけど、と言ったのは聞かないふりをしてやろう。

「どなんなん？」

「昼寝宇宙人が寝てる姿を見た人は全員眠くなってくる」

「ショボ」

「言うな！」

「痛いわ！しばくな！」

星野は昔から力が強い。しばかれると痛いので今日だけでも何度か避け続けてきたのにここにきてやられた。絶対こっちの方が特殊能力だろ。

「宇宙人の説明はこれで終わり？」

「終わり。」

これで終わり？星野は確実に宇宙人の話題でひとつ避けているものがある。なぜあの時泣いていたのか。それを言ってくれないのは、僕に抱え切れる話でないと思っているからなのか。そんなの僕はいつでも受け止められるぐらいの器を持って待ってるのに。僕の方から聞くことはしない。星野の方から言ってくれるのを待つ。言われるくらいまで信用されたいから。それまでどんなこと言われても受け止められる心だけを養うことにする。

「絶対また言うから。」

少し笑みを浮かべながら星野は言う。なんのことは言われなくてもわかった。同じことを考えてくれていたのだと、覚えててくれたのだと思うと嬉しかった。気持ちはどうおさえでも踊った。

「待っとく。」

ここで僕は唐突に謎が浮かんだ。

「ていうか相談ってなんや、宇宙人の話終わってもうたけど。」

すると途端にさっきまでの勢いがとまり、言い辛そうに話し始めた。

「めっちゃ言いづらいことなんやけどさ」

「今の話より？」

「うーん、良い勝負や。」

しばらくうだうだしていた星野が思い切ったように言う。

「実はさ、今谷田にした話を昨日の夜酔った勢いで短編小説にして出版社に送っちゃったんだよな。だからその原稿が出版社につく前に一緒に取り戻して欲しくてさー」

沈黙。僕の情報処理が追いつかない。は？いやこいつ今なんて言った？

「…ん？え、いやいやいやいや…え？」

「しかも驚きのノンフィクションですって書いちゃった」

マジックの太字で…と言ったこいつの言葉を俺は聞きたくない。ので、聞かなかったことにする。そしてまたもやしばしの沈黙。このあたりで僕の情報処理能力が追いつく。

「いや何してんだよお前え…切腹じゃん二人で」

僕は力なくうなだれた。ここが家なら叫んだ。星野との付き合いは幼稚園からだ。それでもこのやらかしは今まででトップレベルでやらかしてる。いやこいつ何してんだ。アウトだろそれは。僕に宇宙人の話をする前に全世界に公開しようとしてるやん。というか俺の人生終わりかけてるやん。そこまでをやっと今頭で理解した。

「お前絶対アホだろおお」

僕は力なく叫んだ。もう叫んでやった。店に迷惑でない程度で。

---

私は聞いてしまいました。どうも、大阪で主婦やらせてもろてます谷田です。名前は雪です、生まれも育ちも京都です。旦那と息子がいる。息子は五歳で名前は慧。あー、あと旧姓は星田て言います。えーと、旦那と出会ったのは大学時代で付き合ったんは…大学の二回生の時？んー、ちょっと怪しくなってきたんでこれぐらいで自己紹介終わらして本題入りますと。

今日友人と飲んでた旦那が帰ってきたんが深夜2時。私は眠い目えこすりながらベッドから降りて旦那を出迎えに行った。外で飲むときはいつもはほろ酔い程度しか飲まへんのに、今日は泥酔してて、玄関の段差で旦那が顔からこけはった。痛そう。もちろん私は良妻なので、遅すぎる帰宅時間には触れず、大丈夫！？と心配して走る。すると旦那は半泣きになって床とキスしながら、「郵便物泥棒…」と言いました。郵便局員の仕事をしている旦那がこの言葉を言うと事件性を感じますなあ。私は思いました。郵便物を盗んだコソ泥が出たんやと！でも今日居酒屋に行く前は特に何も言ってへんかったし…とここで私は真相に気づいてしまいました。

「星野くんが関わってるんやな…！」

今日旦那と一緒に飲みに行った友人の星野くん。彼がなんらかに関わってるに違いない！いつもと酔い具合が違うのにも納得いくし、居酒屋で会ってきた人物というと彼しか考えられへんのや！

そうこう考えてるうちに旦那はこけたままの体制で就寝。この今床で寝てる旦那をベットまで運ぶという肉体労働の開始を察する。あ、ちょっとイラっときてるぞ今私は。

「起きたら全部説明してもらうからな…端から端まで絞りとったるわ」

セリフが悪役っぽいのもご愛嬌ということで。

---

8月2週目の日曜日、午前9時。いつもより2時間遅い時間で旦那起床。昨夜は結局30分かけて旦那を運んだ。178cmの男を164cmの女にすぐ運べるかと言われれば、答えは否だ。私は生憎ボディビルダーなどではない。一応言っておくがスポーツ選手でもない。そこらへんの主婦なんだぞ私は。それだけ時間をかけたし、足もバカスコ壁にあてまくったし日頃の恨み辛みも全部言ってやったのに結局旦那は全く起き上がる気配なくグースカ寝てた。くっそ、気持ちよさそうに寝やがって。

そんな夜のこともすっきり抜け落ちているようで、起きる時間以外はいつも通りだ。

「おはよう雪」

「はい、おはようございます」

「…ん？」

「とりあえず顔洗ってき」

旦那は私の助言に素直に従い顔を洗いに行った。私の返事に違和感を感じているようなので、顔を洗って帰ってくるあたりには頭も冴えて昨晚のことも思い出さだろう。彼は酔っている時のことを覚えているタイプだ。ちなみに今いない息子は高校時代の友達で今も交流が続いてるママ友のみっちゃんの家で昨日から二泊三日のお泊まり会中だ。みっちゃんのところにも慧と同年の男の子がいて、なにかとつながりがある。

そうだ。慧がいれば頭が冴えるまであの恥ずかしい手紙をかくことはなかった。もしも、なんて考えだすと止まらないので、もうこれ以上考えはしないが、なんというタイミングの悪さ。

実は旦那が起きてくる前に、星野くんへ’ ’あの恥ずかしい手紙’ ’を書いて投函してしまっただ。手紙の内容はとりあえず励ましていた…気がする。郵便物泥棒してもいいことはないよ、どうやって盗んだかわからないけど、なんか困ったことがあったらあんたの親友の谷田翼がいるだろ、みたいなの。翼というのは旦那の名前で、というのはこの際もうどうでもいいけど。私は手紙を投函したことをとてつもなく後悔している。今日うちの地域では土日は郵便の配達がないので届くとしたら月曜日だ。月曜までに星野くんになんと弁明すべきか…とひたすらに悩む。

昨日の夜、郵便物泥棒の話が気になりすぎてか、星野くんが世界中の郵便物を盗む夢を見た。そんな夢を見た直後の、朝起きたばかりの私の頭には「星野くんを諭すために手紙を書こう！」と言うことしかなかった。そんなかなり寝ぼけた状態で私は手紙を書いたのだ。内容もふわっふわだったと思うし、まずまず星野くんが郵便物泥棒をしたとは限らないし、最悪を考えれば郵便物泥棒という単語をたまたま旦那が発しただけで全くそんな事件はなかったのかもしれない。もうすでに冴えた私の頭の中で一番可能性があるのは、一番最後に述べた’ ’最悪’ ’だ。郵便物泥棒があればちょっとしたニュースぐらいにはなると思うのだが今スマホで調べる限り全くそういったニュースはない。

ああもう私は今、郵便物泥棒になりたい。そして星野くんに送ってしまった手紙を破り捨てたい！

旦那が顔面蒼白で洗面所から帰ってくる。私も手紙の件を思い出して顔面蒼白だ。青白い顔を二つ見合わせて机に座る。先に赤みを取り戻し始めた女の方が先に話を切り出した。

「さて全部説明してもらおうか。」

「ちょおタンマ」

そう言ってしばらく考える。

「一本電話だけさせて」

「うわ、怪し。何、何隠してんのや。なんかやらかしたか？郵便物泥棒の犯人は裏の裏で翼か？犯人面しとるもんな」

けらけら笑いながら気にしているところを突っ込めば怒涛の勢いでツッコミが飛んでくる。

「ちゃうわ！！だれが犯人面や！…別に三白眼なだけやし。お前だって最近丸っこくなってきたやんけ」

…気にしてるどころ突っ込んできよって…。

「すぐ痩せますう、ちょっと最近肉料理食べすぎただけやしー。電話やろ？しといでよ。」

「おん」

私がそう言うと旦那はそう返事をして席を立ち、携帯を持ってリビングから廊下に出た。電話の相手くらいわかる。星野くんだろう。はてさて関西出身の天然三十路はどうでるか。

---

僕は星野に電話する。まさか嫁に郵便物泥棒の方をバラしてしまうとは…。「郵便物泥棒」というのは、星野が間違えて出版社に郵送してしまった原稿を取り戻すための作戦につけた作戦名だ。昨日はかなり酔っていたし、話し合っていたら帰るのも遅くなってしまったが、昨日約束した通り、星野の宇宙人の秘密をうっかり口に出すことなく昨日は乗り越えられたらしい。僕も星野も昨日はかなり飲んだが、お互い二日酔いにはなりにくいタイプだ。

星野も多分もう起きているだろう。星野に怒られませんように、多分怒られるけどと思いな  
がら電話する。3コールほどで出る。

「もしもし星野？」

『ん～？なんや谷田か？どうしたんや朝から。』

「大問題や、やばい。嫁に「郵便物泥棒」のこと言ってもうた。内容は言っていないけど言え  
って詰め寄られとるんや今。ほんますまん」

『…それ、ワンチャンやけどなんとかなるかしらん。1個、奥の手みたいなもんが実はあ  
んねん。谷田の嫁さん限定にしか使われへんけど、もしものことは考えててん。午後3時く  
らいにそっち行くわ。』

何もしないより、何かした方がいい。誤魔化す事は昔からあまり得意ではないし、好きで  
はない。隠し事は得意だが、聞かれたらうまく誤魔化せない。このまま嫁を誤魔化し続ける  
のは嫌だ。どうしてもと言えれば雪は聞くのをやめてくれると思う。でも、そうなる絶対  
に「誤魔化して言ってくれなかった」という事実が残る。そうなる雪も僕に隠し事をするこ  
とが増えるだろう。それは避けたい。大事な理由があるのだ。頼る以外ない。

「頼む。午後3時やな、待ってる。」

---

「電話してきた」

旦那が廊下からリビングに帰ってくる。思ったよりも、

「早かったね」

「星野が今日の3時に来るって。」

この男は電話の相手を隠す気はないのか。ないんだな。これはもしかしなくても、今日送  
ってしまった手紙について言う機会かもしれない。実は星野さんと仲よしというわけではな  
く、きまずかったがいけるかもしれない。

「了解。とりあえず朝ごはん食べよ。」

私と翼は手を合わせていただきますをした。

私は用意した朝ごはんをレタスから食べる。ご飯を食べる時は、野菜から食べると痩せる  
らしい。そのことをわざとらしく翼に言うと、彼は苦笑して「野菜買い込んどくか？」と言  
ってくれた。そんなの答えは一つ。ふてぶてしく「いっぱい買い込んどいて」と言うと2回  
目は翼はくっくっとして抑えるように笑った。

---

14時55分。約束の時間より少し早めにインターホンが鳴る。

星野が来るまで忙しく動いていた雪はその流れのまま玄関まで走ろうとする。その雪を  
止め、僕が行くよと言って星野を玄関まで迎えに行く。

「やっほ星野。昨日ぶり。」



「よお。」

話しながらリビングを目指す。

「ていうかなんとかなるかもって、どういうことや？なんか方法、あるん」

「ワンチャンやけどな。俺の思ってることがあってればなんとかなるし「郵便物泥棒」の作戦もより成功に繋がるかもしれへん。」

「まじか。」

そうこうしているうちにリビングにつく。

「あ、こんにちは星野くん。」

「こんにちは～」

今回はかなり怒られそうなギリギリな状況だと言うのにこうも楽にいけるとは凶太いやつだ。いや、天然なのか。雪もさっきまで僕に向けていた圧を全くとって感じさせない。ハラハラしてるのは僕だけか。そうなのか。ならば早く始まって早く終わったほうがいい。僕から話を切り出す。

「本題はいろ。星野も座れよ、ほいここ。」

「ありがとう」

僕も雪も座り、雪が話し始める

「じゃ、翼からは色々聞いてると思うので、説明お願いします、星野くん」

雪の圧をまたもや感じるようになり、焦り始める。

「いや、その説明を始める前に一つ聞きたいんやけど、雪さんの旧姓って何？」

「えっと星…あ、ちょっと待って。」

半分開きかけた雪の口。同じタイミングで開き始める星野の口。そして極め付きはあと3秒で午後3時を指す時計。僕はこの先を予測した。できてしまった。僕の頭に昨日の星野のあの発言が浮かぶ。

昨日の夜の、あの発言。一「18時間しかない世界から来た宇宙人やから、15時あたりになると、みんな寝てまうんや。」

午後3時ピッタリ。なんとも間抜けな大きいあくびが二つ重なる。そして次の台詞も重なった。

「「ちょっとこの時間になってくると眠くなってくるんよな～」」

「え、」

雪の驚く顔。

「あ、やっぱり？」

ちょっとイタズラっぽく笑う星野の顔

「あー…。…うん、理解した。」

乾いた笑みが止まらない僕。

「そういうことか～…。」

「うん、ソユコト。」

「え、どういうこと？」

一人理解できていない雪が問う。無自覚パターン、いや誰かに言われなければ一生気がつくことのなかったこの事実。星野がお前が言えというふうはこちらをみてる。

「結論から言うとね」

「うん」

「言いにくいんだけど」

「早く言ってよ」

「あとからちゃんと説明するから、結論から言うだけだからな。」

「わかったって大丈夫。」

昨日の星野の気持ちが嫌というほどわかる。あー、覚悟決めろ！

「雪はさ、宇宙人なんです。」

沈黙。沈黙。開口。

「いや嘘つけ、私宇宙人なん？証拠は？」

そういわれると急にたしかに、という気持ちになった。ただ午後3時にあくびをしただけだ。でも、根拠はないが僕は雪を宇宙人だと思っている。しかも、僕が昨日聞いた昼寝宇宙人の特徴と雪は合っていた。昔から雪はよく寝る人だったし、雪と一緒にいるといつも眠くなる。でも、それを説明できるほどの言葉と知識を僕は持っていない。

「いや、雪さんは宇宙人やと思うで。あのさ、旧性聞いていい？」

ここで口を開いたのは星野だった。僕が思った結論を星野は言ってくれた。気になるのは旧姓旧姓と聞きまくるところぐらいです。

「…なんで旧姓言わなあかんのぉ」

あ、雪がついに不貞腐れてきた。しかも僕と同じところが気になってた。

「まあまあ、それで全部わかるから。」

星野がそう諭し、言うだけなら…と思ったようだ。

「星田やけど。」

「ビンゴ」

答えた雪に星野はそう言って笑う。その星野とは別にとたんに不安そうな顔になる雪。

「大丈夫、説明するから」

これからの話は僕にもわからない。もしかして。

「昨日話したんが全部やなかったな…」

「言うたやん、もしもの奥の手やって。奥の手はあんまりひけらかすべきやないやろ。でもこの話したらほんまに全部やで。」

「一応聞いとくけど、その俺にも言ってない話って原稿には…」

「書いた。…酔ってたんやって！ごめんって！やからそんな冷たい目で見んとって！！寒すぎて死んでまうわ！！」

お前のギャグの方が寒くてこっちが死んでまいそうやわというツッコミは、危ないところだった。首まできてた。

「それで説明やけど。まず雪さんのために宇宙人ついて話すとやな。」

昨日僕が受けた説明と同じような説明を受ける。

「――で、俺も宇宙人やねん。雪さんとおんなじ昼寝宇宙人。」

さっきまで不安まじりで真剣に聞いていた雪の顔から、突如として不安が消えた。星野が同じ昼寝宇宙人と聞いて安心したらしい。

「じゃあ私、宇宙で生まれたとかそういうわけやなくて、あくまでも子孫なんね。」

そうやで、という星野の返事にへー、と軽めに流す雪の適応能力の高さに僕は慄く。早すぎやしないか。というか、ん？

「あれ、いつのまに雪、自分が宇宙人やって信じてるん？」

「星野くんが言ってる昼寝宇宙人って、なんか全然普通やん。しかも辿り続けたら宇宙人に着くけどってレベルやし。なんか聞いてたらちょこちょこ心当たりあるんよな。それに宇宙人仲間にも会えたし安心や。こんな感じやったら宇宙人の子孫でも地球人でも特に不自由ないし気にならへんな〜。」

なんというアバウトな回答。ここまで割り切れるとかっこいい。僕も言ってみたくなる。宇宙人仲間、と言われて心なしか嬉しそうな星野が証明の解説編に入る。

「んじゃ、なんで雪さんが昼寝宇宙人やて分かったかと言うとやな。まず、決め手になったのは旧姓や。明治時代に戸籍で苗字をつける時、昼寝宇宙人全員集まって、ある決め事をしたんや。苗字に『星』の漢字を入れること。これが決まり。谷田の結婚式の時、旧姓が星田って書いてあったから、あ、仲間やって思ってた。そんで、嫁入り、婿入りする子が生まれてきたら昼寝宇宙人のことできるだけ言わへんようにする決まりがあったらしいねん。苗字変わるとややこしくなるから。昼寝宇宙人の把握が難しくなるから。今の時代、変わりつつあるけど基本嫁入りになってるやん。やから多分お父さんとか、言わへんかったんちゃうかな？」

新しいことを聞くと毎回疑問が浮かぶ。今回も例外ではなく疑問が浮かんだ。

「あれ。今気づいたけどさ、星野のとこって婿入りなんか？星野家ってお母さんの家系なんやろ。」

「そうやねん、お袋の時代、大きい家門は家残すのに必死やったらしくてなあ。星野家は昼寝宇宙人本家の星家とは血縁が近かったから、親父が星野家の2人娘の次女に婿入りっていう形になったんやあって。恋愛結婚やったらしくて幸せそうやでよかったけどな。ま、ということで雪さんが昼寝宇宙人ということです。」

一通り説明が終わる。でも、本題はまだ終わっていない。目的は「郵便物泥棒」の件を雪に説明すること。もしできれば、作戦に加担してもらおうこと。

作戦の説明はもちろん今回の元凶からしてもらおう。次は僕が星野に視線を向ける。その視線を受け取った星野は見るからにギクっとする。結局言うんや、潔く言っただれ！

「あの、やな〜、言いにくいんやけど」

「星野さっさと〜潔く〜」

「分かった！さっさと潔く！俺が今した宇宙人の話を出版社に小説にして送ってしまいました！その手紙を取り返す作戦を立てたので手伝ってもらいたいです！」

「まっ…じか〜。やらかしたな星野くん。そして私もやらかした。」

いや待て雪の分は知らない、いつのまに一体何やらかした！？自分の分は棚に上げて僕に説明求めてたな！？しかも飄々とさらっと言ったろ。聞き逃すと思ったか。怒りを含んだ視線を雪に向けると、雪は効果音でテヘッとでも付きそうな身振りもつけて舌を出す。三十路近いアラサーがやってもかわいくないぞ…。自分への視線が哀れみにかわったことに気づいた雪はあとでグーをお見舞いするわよといわんばかりの迫力の視線で帰ってくる。雪も星野ほどではないが力が強い方で殴られると痛い。え、やっぱり特殊能力こっちゃだろ。

「星野くんのやらかしたことに、星野くんという点と手紙という点で共通点のあるやらかしなんやけど」

言い淀んでいる。こちらも言い難い話らしい。僕はもう雪に余計なプレッシャーをかけないように何も言わない。自分から言おうとした時点で今回は許そう。どんなやらかしかわからないが、少しぐらいは…

「勘違いをして恥ずかしすぎる内容の手紙を星野くんに送っちゃって…勘違いしてごめんね。」

多めに見てあげよう、と思っていたが前言撤回。いや前言撤回しなくても少しを大幅に超えていってしまったので結局同じことだけど。いや勘違いって何それ、まあ謝るのはわかるけどそれで手紙って！！SNSとか通り越して手紙！？絶対寝ぼけてたやろそれは。

「ていうか星野くんお願いや、紬さんが読んでまう前にシュレッダーかけてほしい！」

そっちかよ！紬さんというのは、星野の嫁さんの名前で、雪とは仲がいい。

「雪さん申し訳ないんやけど、うちにシュレッダーないねん。」

「ほんま！？終わったあ〜。でも紬さんには絶対見て欲しないねん。解決方法ないかなあ。」

話はあとで聞くとして、とりあえず今僕には解決方法が浮かんでいる。まずは提案。

「解決方法、あるで。『郵便物泥棒』の時に一緒にとってくる。」

「そうやん！もともと集まったのも『郵便物泥棒』について説明するためやった！忘れとったわ。俺が説明する？」

僕が説明するよと星野に言って、雪に向き直る。

「まず、『郵便物泥棒』って言うのは、星野が間違えて送ってしまった小説を取り戻す作戦の作戦名なんや。雪にはその協力者になってもらいたいと思ってる。一応聞きたいんやけど、雪が手紙を出したんってうちから一番近い公園前のポストやんな？」

雪は頷き、そのまま話し始める。

「協力者？いいけどなにすんの。」

「それについても今から説明するわ。簡単に言うと、ポストから手紙を回収する時に、二人の手紙を抜く。今日は日曜日で、次の手紙の回収日は月曜日。つまり明日や。回収する時に昼寝宇宙人の力を使って、回収担当の人にちょっと一瞬うとうとしてもらって、僕が手紙を抜くんや。」

僕の仕事は郵便局員だ。手紙の回収は、郵便局員の業務の中にはない。手紙の回収の担当は郵便集配員だ。今回はほんとうにたまたまとしか言いようがないのだが、僕は月曜日に臨時で郵便集配員の仕事に入ることになっている。しかも管轄内に星野と雪が投函した手紙の入っているポストがある。

小さいうちの郵便局では、郵便集配員のバイトを絶賛募集中だが、それほど集まらない。かろうじて集まったバイトが1人いるが、そのバイトに仕事を教える時間のある人間がいない。教えるために一緒に回っていたら、回収が間に合わないのだ。ということで、そんな小さい郵便局の中で唯一郵便集配員を経験したことのある郵便局員、つまり僕が、教育係に任命された。大学の時に一時期バイトをしていたことがあったのだ。今の進路を決めるきっかけにもなったし、中々にいいバイトをしたと思っている。

星野の手紙も同じポストに投函されている、というのは、僕の家で飲んだ帰りに手紙を投函したかららしい。小説を書いて出版社に送ろうと唐突に思った星野は、僕に紙と封筒をもらって小説を書いたらしい。言われてみれば渡した気がする。星野が書いていた手紙に興味になさすぎてしっかり覚えてなかった。しかし今となってはそれが不幸中の幸いだ。同じポストに投函してあるのだから。

「ええやんそれ！採用！」

「確かに。一方的に手伝ってもらわなくてもいいからこっちも気楽やわ。」

僕の仕事や管轄、臨時の仕事についても承知している雪は詳しく説明せずともだいたい伝わったらしい。星野には、昨日作戦を立てる時点で伝えてある。

「確認やけど、私が作戦当日にすることって、寝ればいいってことやんな？」

うとうとさせる、って私たちの姿見て眠くさせるってことやんなと念押しするように雪が聞く。と、その問いに星野が答えた。

「あってる。あ、寝る場所ってというのはポストの前にある公園のベンチな。俺も隣で一緒に寝とくから2人の昼寝宇宙人が寝る姿見て効果倍増って言うことや。」

へー、そういうこと。実は俺も、なぜ雪も一緒に寝ると、成功確率が上がるかよく分かっていなかったが、効果が倍増するのか。

「倍増？するんや」

雪も驚く。しかしそこに、でも…と付け加えてさらに聞く。

「翼は寝てまわへん？私らの影響で寝た人を見るだけで眠くなるんやなかったけ。それやったら、眠くさせる対象のバイトくんをみたら翼も眠くなっちゃうんやない？」

星野は、今回初めて雪は宇宙人について知った仲間なので、昼寝宇宙人の能力について詳しく話していたのだ。そして、またもや星野が雪の問いに答える。

「谷田はな～、特殊やねん、特殊。幼稚園の時から俺がおったやろ？それから大学生になって雪さんと会って、さらに昼寝宇宙人の血を引いてる慧くんが生まれた。その状態で俺とも頻繁に会ってる。やからか知らんけど多分耐性みたいなんがついてるんやと思う。普通、そんなことあんまりないんやけど。でも、やっぱり昼寝宇宙人と結婚した人には谷田ほどやないけどちょっとは耐性つくみたいや。子供とかも生まれて、昼寝宇宙人に会う機会がふえるからな。」

「すごい。まるで翼も特殊能力あるみたいやん。かっこいい～」

ひゅー、と口笛を吹けないらしく、普通に言葉にして言ってた。言うぐらいならするな。というかお前も特殊能力あるやろ！ほぼ同レベルの特殊能力が！もう何も言わず真顔でしばらく。

「痛っ、しばくな嫁を！翼昔っから力強いねん！それが特殊能力ちゃう！？」

「調節してピコピコハンマーぐらいの力にしたやろ！喧嘩売ってきたのそっちやぞ！」

というか俺が雪や星野に思っていたことを全く同じようなことで返されるとは。それまでケラケラ笑って見ていた星野が、締め言葉を口にした。

「痴話喧嘩はまた別でやってくださいな。今日はとりあえず帰らせてもらおうわ～。明日はよろしくな、あそこのポストの回収1回目は8時30分～8時40分やから、8時に集合な。」

雪も僕も、痴話喧嘩という言葉にひっかかったが、なんとか飲み込んで答える。

「…了解」

「…任しとき」

午後5時、解散。星野を玄関まで送る。

「ま、なんとかかなりそうでよかったわ」

「谷田ご夫妻にはお世話になります～」

「ま、その妻の方の不祥事もありますから。」

「んじゃ、明日よろしく」

「ん、今日はわざわざきてもらってありがとうな」

そう言って星野とも別れ、部屋に戻る。

部屋に戻ると、雪は椅子に座ったままうとうとしていた。

そんな眠い雪には申し訳ないが、今から僕たちはもう少ししなければいけない話がある。僕はコーヒーを入れて、雪の前に置く。

「結構眠そうなので今すぐにでも寝てもらいたいところやねんけど。」

雪がぴくっと動き、視線を逸らす。心当たりはあるらしい。

「はい、星野に手紙を送ってたって言うのは？」

「…一本電話してもいい？」

「いや誰にやねん」

すると雪は観念したように手紙の内容を話し始めた。そして僕が郵便物泥棒と言った時にその言葉を聞いて連想していた話を聞く。今日は雪には喝をいれようと思っていたが、話を聞いてつい笑ってしまった。絶対笑うと思った、やから嫌やったのに、とか言われても。あきらか寝ぼけすぎやろ。結局笑ってしまって場が閉まらなくなったので「気をつけるように」で話は終わり、こちらもお開きになった。

そのままベッドへ向かう雪。僕は今からお疲れの雪に変わり晩ご飯をつくる。明日は成功しますように、と祈って雪は寝て、僕は晩ごはんを作った。

---

日曜日は、そのままにも起こることなく平和に終わった。そして月曜日。今日は、バイトの子との顔合わせがあるため、早めに出、7時45分に郵便局に着く。まだ他には誰も来ていない。うちの郵便局は9時に開くので、郵便局員は8時30分頃にみんな集まる。そしてこの地域のポストは8時30分が最初の回収なので、郵便集配員は、8時頃にくる。身支度を整え、車の用意をする。2人で行く場合は車でないと不便だからだ。7時50分頃、バイトの子がついた。

「遅くなってすみません。おはようございます！谷田さんですか？僕、八木です。」

「おはよう。僕が谷田です。よろしく、八木くん。」

「よろしくお願いします！まだ実際に手紙回収はしたことないんですけど、やり方とか諸々は簡単に前回教えてもらってます。」

「了解。」

愛想のいい子だ。うまくやれそうでよかった。真っ茶色の髪の毛に控えめに両耳についたピアス。癖毛なのか、髪の毛はくるくると巻かれていた。背は170前後だろうか。垂れ目で柔らかい印象がある。顔のそばかすが笑った時にかわいさを足していた。最近の子はおしゃれだよな、と思う。あれ、やばいまだ一応二十代なのに最近の子とかおじさんみたいなことを…。自重しよう、自重。

他の郵便集配員の人たちも集まってきた。そろそろ出る時間だ。

「行こうか、八木くん。」

「はい！」

その返事を聞いて、車に乗り込む。担当場所の手紙を回収して、8時35分近くなってきた。ついに次のポストが、作戦決行のポストだ。緊張してきた、けど覚悟は決めてきたぞ！そろそろ公園に着く。落ち着いて作戦の工程を思い浮かべるんだ。

①ポストを開ける。封筒が投函してある箱とハガキが投函してある箱があるので、ハガキの方を八木くんを持ってきてもらう。

- ②封筒が投函してある箱の中から2人の手紙を探す。
- ③昼寝宇宙人の力を使う。
- ④八木くんがうとうとして記憶が曖昧になってきたあたりで手紙を抜く！そして隠す！

結構アバウトかつ、昼寝宇宙人の特殊能力に左右させるところがある。しかも僕には少しうとうとするくらいの効果しかないので、本当に心配だ。僕が特殊なんだと星野はいうが大丈夫だろうか…とりあえずやるしかない。

「ついたよ。」

八木くんにそう言って車を降りる。公園のベンチには寝ている2が見える。上手に爆睡中だ。2人は僕たちの後ろ側にいて今は見えない。八木くんも降りてきて、やり方を説明する。

手順①成功、手順②に移る。…手紙発見！次は手順③だ。そう思って後ろを振り返ると、なぜかさっきまでと様子が違う八木くんがいた。ハガキの入った箱を持って立ちすくんでいる。これは…寝ている判定か？そうしていると、寝息が聞こえてきた。八木くん君立ちながら寝れるのすげえな！！そして僕は手紙を抜く。そしてポケットに隠そうとする。

……

……

あ、まって本当にやばい制服のポケットに手紙がはいらない。

冷や汗が止まらない。やらかした。ラッキーなことに今はまだ誰も人は通っていないし、八木くんは先ほどの体勢のまま動かない。手紙を片手に持ち、もう片方の手でポケットをこじ開けて、ぐちゃぐちゃに突っ込もうとする。その時。ばくん、と言う音がする。

突然のことだった。目の前から手紙が半分消えた。歯形をつけて。間が少し空いて、ちょっと冷静になってきた。そして手紙が半分消えたのはいつのまにか前に立っていた八木くんのしたことだと理解が追いつく。

えっ、と声をあげる余裕もなく前を見る。というか斜め上をみる。八木くんはいつのまにか僕を超えるくらいの長身になっていた。180cm前半だろうか。そしてもぐもぐしている。もぐもぐ。なぜ八木くんだとわかったかと言うと、耳に朝と同じピアスがついていたのと服がピチピチになっていたのと、髪の毛がくるっとした茶色の癖毛だったのと、顔にそばかすがあったからだ。つまり、手紙を食べている点と背が高くなっている点以外は全くもって特徴が一致していたのだ。

ごくん、と効果音のつくような音をならして飲み込んだ八木くん…と思われし人。そうすると、八木くんの身長は縮み、制服もピッタリになった。そして我を取り戻したようにこちらと手紙を見比べると顔から血の気がひいていく。そして赤みを取り戻されてきたと思ったらボロボロと泣き始めた。

「誰にも言わないでください…」



③も④も成功しなかったし、ハプニングというか新しいことが起こりすぎているが、なんとか手紙を取り戻すことには成功した…と思う。

「わかった」

一周回って冷静になってきた僕は、八木くんに一声かけベンチで寝ている2人を起こしに行った。一瞬驚いた顔をした八木くんも、僕がベンチで寝ている2人と関係があると理解したようで、泣きながら了解の意を示す頷きを返した。僕も八木くんもお互いになにか事情があると察したのだった。

ベンチへ向かい、声をかけると、2人は案外普通に起きた。

「谷田どうやった、成功したか？」

「流出は止めたけどアクシデント発生、多分大丈夫な方のアクシデント。帰ってから全部説明するから、今は解散。仕事戻るわ。」

八木くんのもとに戻ると、既に八木くんは泣き止んでいた。

「まだ回収残ってるから、行きながら話聞くわ。僕の話もその時。」

今度はしっかりと声に出して、「はい。ありがとうございます」と八木くんは答えた。

八木くんはまた泣きそうになっていて、既視感あるな～と思って一番仲がいい友人とのある思い出に重ねると、つい笑ってしまった。

---

回収しながら聞いた八木くんの話を要約して一言で言うと、彼は宇宙人らしい。昼寝宇宙人とは別の。

彼は、雑食宇宙人という宇宙人だと言っていた。紙が、特に不純物の少ない紙が好物らしく、地球にきてからは別名で山羊宇宙人とも呼ばれるらしい。好物の紙をみると変身してしまう雑食宇宙人。基本的には雑食宇宙人はそれを調節できるようになっているが、まだ八木くんは苦手らしい。

紙に慣れることで、紙を見た時変身しないようにしようと郵便局のバイトに入ったが、なぜか谷田さんの持っていた手紙に反応してしまった、と八木くんは言っていた。

他の手紙と僕が持っていた手紙の違いは単純明快で、それは昼寝宇宙人が書いた手紙かどうか、だ。八木くんが不思議そうにしていたので、僕も事情をかいつまんで話し、なぜ八木くんが反応したのか順をおって説明した。すると八木くんは、

「あのベンチの二人組、昼寝宇宙人の方々だったんですね。僕の祖父が昼寝宇宙人の皆さんにはすごくお世話になった、ってよく言っていました！」とのことだった。

あと、意外にも共通点だったのが、バレたら切腹、という点。共通点そこなんか。あれか？海外の人が侍にハマる感じか？いやでもなんでそこが共通するんや、というかよくよく考えたら僕、今二重で命狙われてるやん、危な！！

あともう一つの共通点はなんとも安直なネーミングセンス。雑食で！！昼寝で！！誰が命名してるか知らんがセンスねーな。

その他の業務も終わり、家に帰った僕は、雪に今日の話を話す前に星野に電話をした。僕の中で宇宙人といえば星野で、僕の羅針盤だ。言っているか、とか、これどういうこと、とか。全部教えてくれるし、わからなくても一緒に悩んでくれる。

「もしもし、谷田？ 今日の話か」

「そうや。結論から言うとやな。今日一緒にいた彼、雑食宇宙人らしい。」

あー、と答える。心当たりがあるらしい。

「うちのっっていうか昼寝宇宙人の住んでた星は、もう滅亡したのや。それこそ地球上でいう平安時代ぐらいに。何光年か離れてたけど、星が爆発する寸前やったらしい、選択肢なんか1つや。着陸したんが江戸時代ってわけやけど、雑食宇宙人は違う。まだ星は残ってる。でも結構近年に爆発しそうな星の1つらしくて、百年くらい前から移住が進んでんねん。」

「めっちゃ詳しいやないか、なんでそんな知ってるのん？」

「俺さ、昼寝宇宙人束ねてる、本家の当主の従兄弟なんよな。」

「おん」

「お袋が2人姉妹の次女やねんけど、長女の方、つまりお袋のお姉さんが本家の方に嫁入りしてさ。その息子が今本家継いでんの。結構そいつとは気のおけない仲やねん。」

「へえ。」

「そんで、紬も本家の当主の従姉妹なんよな。別の家系やけど。」

「...お前んとこ、恋愛結婚やったよな。家を守っていくためのお見合いとかやなかったよな。」

「本家の当主に紹介されて一目惚れや」

「...すごい話やな。なんて言うか...結婚式過ぎてるけどおめでとう。」

よく考えたら星野の奥さんの旧姓って星川やった気がする、結婚式で見たぞ。

「そんで、本家と近いもの同士結婚するやん、しかも両方昼寝宇宙人やし。やから、俺ら宇宙人関係の仕事することになって、今その仕事してんねん。今、地球に来ようと思ってる宇宙人をサポートする仕事。」

「星野の勤めてんのって観光会社じゃなかったっけ？」

「ここまできて嘘はつかへん。観光会社から転職して今や。」

こいつ、めっちゃ隠し事できるやん。というか、八木くんが言っていた「お世話になった」と言うのはそういうことか！ひとしれず納得しながら、僕は星野にありがとうと言って電話を切った。

廊下からリビングに戻る。

「雪」

「おー、翼電話終わった？」

「ぱぱおわった？」

今はもう息子の慧もお泊まり会から帰ってきている。雪に伝えるのは慧が寝てからになりそうだ。

「終わった。晩ご飯待たせてごめんな～、食べよか。」

「んじゃ、慧いつもみたいに言ってくれる？」

「ええよ！いくで。手を合わせて！いただきます。」

「いただきます。」

「いただきます。」

みんなで手を合わせてご飯を食べる。それから慧が寝るまでは早かった。お風呂を上がり、ベッドに入り、すぐに寝た。よほどお泊まり会が楽しかったらしい。ずっとお泊まり会の話をしてきた。

それからは僕と雪で今日あった出来事を話していた。雑食宇宙人のことを知らない雪には、最初から説明する。

「へえ、昼寝宇宙人以外にもいっぱいいるんや、宇宙人。歩いてるうちにすれ違ったり…はさすがにそんなないか」

「あるんちゃうか。星野の仕事が成り立つぐらいやから。」

「それもそうやな。ていうか翼、あんた…周り宇宙人だらげやん。これ、蒸し返すわけやなくて結構本気で言ってるんやけどさ。もしかして『特殊能力・宇宙人を引きつける』を持った宇宙人なんちゃうか？」

そう言われると確かに。僕もおかしいと思っていた。この圧倒的宇宙人遭遇率！この土曜日から月曜日だけで判明した周りの宇宙人、4人。雪、星野、紬さん、八木くん。親とか祖父とかを入れ始めたら止まらないのでこころへんで止めておく。高校生の時の僕に言うと発狂して倒れそうぐらいには高い。

また母に聞くことにして、もう寝た。実を言うとそれからしばらく自分のことを宇宙人だと思っていた。誰にもいえないが。

その日は、それほど変わっていないように見えて、精神的にも肉体的にも疲れていたようで、布団に入ったらずぐに寝れた。

後日母に、僕って宇宙人？と聞くとガチトーンでどうしたん、高校の時からあとの記憶忘れた？大丈夫、なんかあったんか？と心配された。さすがにそこら中に宇宙人がいるわけではないらしい。恥ずかしくて母にはそれから半月くらい電話できなかった。

---

仕事の方では、八木くんになつかれた。ことあるごとにこっちまで走ってくる。後輩とは仲は良い方だが、ここまでなつかれるとかわいい。その日は唐突にあの事件の後、星野から聞いた雑食宇宙人の話を思い出したので、郵便局で八木くんはその話をしてみると、

「あ、そうなんですよ！うち、おじいちゃんが雑食宇宙人で最初に地球に来た一軍の1人らしいです。」

とのことだった。まさかの地球生まれ・地球育ちの方でしたか。絶対宇宙生まれ・宇宙育ち、移住地・地球だと思っていた。

それから八木くんになつかれた話を星野にすると、なぜか共感の話があった。

「いや、分かるで。その雑食宇宙人くんの懐いちゃう気持ち。タイミング今か分からへんけど、俺がなんで初めてお前に宇宙人やって話した時に泣いたか説明するで。」

「今か！？雰囲気も何もないな。」

2人の両手には缶ビール。今日は星野の家で飲んでいる。

「一言で言うと誰かに自分のこと全部わかっというてもらいたかってん。俺ってこういう人間なんですよってこと。あのタイミングやなかったら言われへんかった、誰にも。だって谷田に話した次の日に『誰にも言ったらあかんよ、言ったら切腹よ』って言われてんもん。それにさ、星が苗字につく人とか、そんな会わへんやん。俺、親戚除くと雪さんが初めてやで。俺の親戚関係って仲はいいけど、そんなに頻繁に会いに行くタイプちゃうかったからさあ。やからこそあの時、俺にとって一番近い存在はお前やったんや。そいつにさ、認めてもらえてほんまに嬉しかったんや。俺、何があってもこいつが認めてくれるから大丈夫やって思っでん。ありがとな、今でもそばにいてくれてほんま心強いんや。これからも頼んだわ。」

僕はちょっと恥ずかしいのと照れたのどで目をそらした。

「…頼まれたー」

「それにお前のこと、俺もわかってるつもりやで。例えばさ、意外と谷田って結構拗ねるんよな。こないだ飲みに行った時も、俺がなんであの時泣いたか言わへんかっただけでちょっと拗ねたやろ。」

「な！なんでそんなこと覚えてるんや！というかそこまで饒舌になってるってことは星野も結構酔ってるやろ。三十路近い親父が2人でお互いわかり合ってるで、とかいう話する方がきついわ、やめやめやめ！もーやめ！今日は飲む！」

「わはは、潰れても送ってやれへんぞ、ほどほどにしとけ」

俺たちはこれからも一緒に酒を飲むだろう。これからもいろんなことがあるだろう。楽しいこともあれば今回みたいに事件が起きるかもしれないし、絶対大喧嘩する。それは絶対。でも全部終わった後にぐちぐち言いながら、たまに素直になりながら2人で一緒に酒を飲むような関係でいたい。…ということは肝臓だけは大事にしていかなあかん。

親友の星野 颯へ。 これからもよろしく。

---

【颯 はやて】一風吹かす。疾風の。風が巻き起こる様。

→トラブルメーカーのような。谷田に影響を与える。

【翼 つばさ】二つ揃えて飛ぶ。空を移動する。助ける、守る。

→颯や雪など支えてくれる人がいないとなかなか動けない。風に乗って、つまり颯の関わる色々なことに関わっていく。結局は颯や雪のために動き始める。

【雪 ゆき】降ると地面で受け止められる。春にとける。大災害を引き起こすこともある。

→異例のこと、つまり宇宙人であることが分かっても受け止めてくれる翼や、宇宙人関係のことで支えてもらえる颯や紬がいる安心感。そして、物事をおちついて受け止められる器の大きさを示す。大災害、は他の人から受けた影響で新しいトラブルや、元々あったトラブルを加速させることを表す。